

# リメディアル教育における英語多読\*

— 読むことへの意欲を高める要因 —

城 一 道 子\*\*

## 1. はじめに

英語多読授業を始めて3年目を迎えている。英語に苦手意識をもつ学生、英語学習につまずき習熟度が低い学生、日本語でもあまり本を読まない、ましてや英語で本を読むという経験のほとんどない学生たちが、英語多読に意欲的に取り組んでいる。英語力レベルや読書量に差はあるものの、多くの学生が、多読の授業は楽しく、英文を読むことに対する抵抗感が以前より減ったと感じている。英語力の向上という成果を手にしてしまうとまでは言えないが、多読は、受講者を動機づけ、読むことへの意欲を高めている。

英語多読は、たくさんの本を読むことにより英語のインプットを大量に取り入れ、リーディング力、ひいては英語力全般の向上を目指す学習法として古くからその効用を認められてきたが、日本では、よく知らない外国語で読むという行為は心理的なバリアが高く、習熟度の高くない学習者には試みられることのない学習法であった。

Day & Bamford (1998)<sup>1)</sup> は、本を読む目的は「たくさん読むこと」、「読むことを楽しむこと」にあり、リーディングの授業を、教室に来て、テキストを読み、練習問題をやり、教室を出ていくという「空虚な儀式」から変えたいという思いから日本で英語多読授業を採り入れたという。リー

ディングの目的は自分の楽しみのためであり、読むことによってのみ報われるものであるべきという彼らの主張は、リメディアル教育を必要とする英語基礎学力の低い学生にも受け入れられている。

本実践報告は、「易しい英語で読む多読」授業が、習熟度にかかわらず、学生の動機づけを喚起し、読むことへの意欲を育てているというこれまでの成果(城一, 2011)<sup>2)</sup>を踏まえ、本実践の受講者が読むことへの意欲を支える要因について再考察することを目的としている。

以下、2節では本実践における英語多読授業の概要、3節では本実践の背景およびこれまでの成果について述べ、4節では、アンケート調査結果や受講者の記述をもとに受講者の多読への意欲を支える要因について分析・考察し、5節では、4節の考察をまとめる。

## 2 本実践における多読授業の概要

### 2.1 授業の方法および目的

「易しい英語で読む多読」は、Leveled Readers (英語を母語とする児童・小学生向けの図書) や Graded Readers (学習者のために制限された語彙・文法・構文で書かれている図書)の中から受講者が各自選んだ本を一斉に読みいわゆる授業内多読(SSR: Sustained Silent Reading)である。半期の選択科目で、週1回ほぼ1コマ(70~90分)、実質的に11~12コマを読書に充てている。前期(Reading I)・後期(Reading II)の2期にわたり通年で履修することが可能である。

約2,400冊の多読用図書は図書館の一室に置か

\* 平成22, 23, 24年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究課題番号: 22520632)研究成果報告書(2013年3月)より転載

\*\* 江戸川大学 情報文化学科教授

れ、授業はその部屋を中心に同じ階のフロアも利用して行っている。図書は、可能な限り CD 付で揃えているので、学生は大学から貸与されているノートパソコンで個別に CD を聴きながら読むことができる。図書は、図書館によって管理されており、受講者は授業時間外でも借りることができる。

多読授業の目的は、受講者が自らの興味・関心や英語力レベルにあった本を選び、できるだけ多く読むことである。多読の進め方は、①辞書を引かない（知らない単語は無視し、辞書を引くなら読んだ後で引く）、②わからないところは飛ばす（100%の理解を避ける）、③進まなくなったらあるいは面白くないと思ったらやめる、という酒井式多読3原則（酒井，2002；酒井・神田2005）<sup>3,4)</sup>を採り入れている。この3原則を採り入れるのは、一つには楽しく読むためであるが、辞書を引かなければ読めない本を読むのを避けることができる、また、精読や訳読と異なり、細部にわたり意味がわからなくても内容が理解できるという経験をとおして、「全部理解しなくてはいけない」、「全部訳さなくてはいけない」という英語学習者にありがちな思い込みから生じる不安を軽減することができるからである。加えて、読む過程で語の推測方略や文章の理解方略という認知方略を使う経験をさせることも可能である。

多読は自主的に進められるので、授業時間のほとんどが個別学習である。したがって、各受講者がどんなふうに本を読んでいるかを知るのは、主に授業後にメールで送られてくる読書日誌（reading journal）をとおしてである。読書日誌は、振り返りを促し、多読を進めるための動機づけに寄与することを目的として受講者に義務づけているが、教員にとっては、読書日誌に返信することにより、受講者に多読を進めるための支援や励ましを提供したり、受講者と個別にコミュニケーションをとるツールとなっている。

## 2.2 評価の方法

多読授業の受講者は、一期目の半期で少なくとも1万語<sup>1)</sup>を読むことを目指す。評価のために読

むのは多読の本来の趣旨に反すると考えるので、読んだ本のレベルや総語数で評価は行っていない。また、本の内容を理解したかどうかを確認するテストも行わない。評価の対象は、上記読書日誌のほか、読んだ本のタイトルやレベル、語数、簡単なコメントを記録した読書記録（reading record）、リアクション・レポート（reaction report）およびブック・レポート（book report）<sup>2)</sup>の提出とその内容である<sup>3)</sup>。

## 3 本多読実践の背景およびこれまでの成果

### 3.1 大学で英語の授業を受けることの不安

単語がわからない、文法が苦手など英語基礎学力不足からくる「わからない」「できない」という英語に対する心理的な壁（以下、本稿において「英語不安」という）を抱えて授業に臨んでいる学生は少なくない。Krashen (1989)<sup>6)</sup>の「情意フィルター仮説」(affective filter hypothesis) はよく知られているが、学生の英語不安は、動機づけの低さ (low motivation)、不安の高さ (high anxiety)、自尊心の低さ (low self-esteem)<sup>4)</sup> という学習を妨げる情意フィルターの高さとして説明できるであろう。英語学習につまずき、理解できなくなると、学習意欲は低下し学習行動は起こりにくくなる。学習行動が起こらないと、成績不振を招き、英語不安は高まるだろう。そして、不安の高さは学習活動において自尊心を傷つけられるようなネガティブな経験となりやすい。英語ができないと思込んでいる学生の多くは、中学・高校で情意フィルターが高いまま英語の授業をやり過ぎてきた者が多いのではないかと思われる。

情意フィルターを低くするという考え方は、外国語教育の現場では広く受け入れられているが、リメディアル英語教育では、とりわけ、学習者の自尊感情が守られるよう配慮することは、清田 (2010)<sup>7)</sup> も指摘するように重要である。学習者は、自らの自尊感情を守るために、参加しない、挑戦しない、故意に努力をしないなど、失敗を回避する行動をとることがあるからである。

本実践の「易しい英語で読む多読」はこのような英語不安を抱える学生の情意フィルターを低くしているが、情意フィルターを低くするのは学生の読むことへの意欲である。この意欲をもたらす要因とそのプロセスが明らかになることで、学生の英語不安を低減し、学習に向かわせるメカニズムについての示唆も得られるであろう。まず、本実践で得られたこれまでの成果の概略を述べる。

### 3.2 本多読実践の成果

#### 3.2.1 対象者

本多読実践の対象者は、選択科目「Reading I」の受講者で、2010年度前期20名、2011年度前期18名、2011年度後期11名（うち前期に引き続き二期目となる受講者は7名）の延べ49名である。英語力を測る試験は行っていないので受講者の英語力レベルを数値で示すことはできないが、多読を始める前の英検の取得状況（アンケートによる自己申告）は、準2級2名、3級4名である。その他は英検その他資格試験の受験経験がないと回答しており、これらの者については、実際の英語力レベルは不明であるが、筆者の見るところ、本実践に参加する前のレベルは準2級に達しないレベルである。

#### 3.2.2 読語数

対象者は、上記で述べた49名のうち、2010年度については読書記録に不備のあった4名、2011年度後期については、前期から引き続き受講した者7名および2011年度後期半期のみの受講で読語数が11万語以上に達した者1名（例外と判断）を除く、37名を対象としている。結果は、半期で平均17,413語である。期別に見た読語数などを表1に示す。

読語数には、授業外で読んだ語数も含まれているが、初めての多読授業で半期1万語という読語数の期待値を達成できなかった者は、37名中10名（27%）である。達成語数は、1万語から2万語未満が最も多く、37名中15名（41%）、また2万語以上を読んだ者は12名（32%）であった（図1）。

表1 読語数

(n=人数)

	n	平均値	最大値	最小値	中央値
2010年前期	16	22,855	60,380	8,066	18,476
2011年前期	18	18,021	56,286	5,337	15,070
2011年後期	3	11,364	16,671	6,328	11,094
全期	37	17,413			

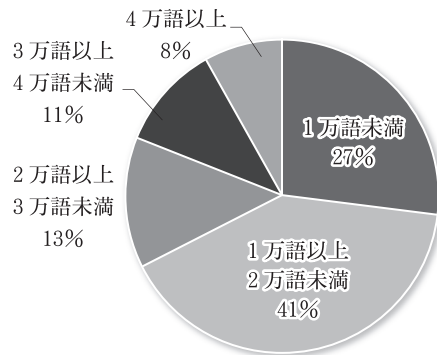


図1 読語数と達成割合 (n=37)

2011年度前期および後期の2期続けて受講した者7名の平均読語数は46,275語（最小17,621語、最大77,795語）であった。二期目になると、程度の差はあるが、すべての者が、読む速度は速くなり、読語数も一期目に比べ増加している。

#### 3.2.3 多読に関するアンケート調査結果

上記3.2.1で述べた本実践の受講者を対象としてアンケート調査を期末毎（各授業最終日）に実施しているが、主な結果は次のとおりである。数字は、2010年度前期、2011年度前期および2011年度後期の3期の平均である<sup>[5]</sup>。

- ① 「多読の授業は楽しい（付1項6）」（94.6%）
- ② 「英文を読むことに対する抵抗感が以前より減った（付1項7）」（96.5%）
- ③ 「英語の本を読むことに意欲的に取り組むことができた（付1項8）」（86.7%）
- ④ 「今後も多読を続けたい（付1項18）」（86.6%）
- ⑤ 「英語を学ぶうえで多読というやり方は好きである（付1項17）」（89.7%）
- ⑥ 「多読は自分の英語力を伸ばせると思う（付1項16）」（87.9%）

多くの者にとって多読は楽しく意欲的に取り組める活動となっており、多読により読むことに対する抵抗感が減り、多読を続けたいという意欲をもっていることが示されている。次節では、このような学生の読むことへの意欲を支える要因について、学生の記述データをもとに考察したい。

アンケートの調査結果は、本稿で関係があると思われる項目について抜粋し、**付表1**に示す。(結果を参照するときは、「付1項6」のように略記し、「付表1の項目番号6」であることを示す)。

#### 4 本多読授業の受講者が意欲を支える要因

##### 4.1 データの収集および対象者

本多読授業の受講者の読むことへの意欲を支える要因を特定し、考察するために、上記3.2.3で述べたアンケートの自由記述およびリアクション・レポートの記述データからデータを収集した。したがって、データ収集の対象者は、上記3.2.1で述べた本多読授業の受講者、延べ49名である。データの収集に際しては、受講者の多読の取り組みに見られる認知(思考)、感情(気持ち)、行動に関しメッセージ性があると筆者が判断した記述を抽出した。

##### 4.2 分析方法および結果

考察のために抽出したデータを整理し、分類した。データから浮かび上がってきたのは、読むことへの内発的意欲、読むプロセスにおけるメタ認知、多読への評価、教材を含む多読の学習環境の評価である。いくつかカテゴリーが得られたが、考察のために7つのカテゴリーに絞った。分類は筆者一人で行っている。7つのカテゴリーと各カテゴリーにおける記述件数を**表2**に示し、各カテゴリーの実際の記述例は**付表2**に示す。

記述例は、互いの関連が深く、分類が難しかったものも多かったが、一次資料としての価値を考慮し、あえて削除はせず、考察を進めながら、最終的に分類した。なお、付されている番号は、考察を進めるための便宜上のものであり、重要性な

表2 記述から得られたカテゴリー

カテゴリー		
①	スタート前の不安	6
②	有能感または自己効力感	27
③	教材と学習環境	12
④	楽しさ・満足・誇り	21
⑤	自己決定感(自律性)	10
⑥	読解に関するメタ認知	16
⑦	多読(学習法)に対する評価	24

どを示すものではない。

#### 4.3 考察

##### 4.3.1 カテゴリー関連図と用語の定義

本実践の多読では、受講者が自分で本を選び、自分のペースで読み進めるので、学習における自由度が高い。したがって、受講者自身が自らの学習に積極的にかかわらざるをえず、受講者の行動は自発的な学習行動となって現れる。このような行動は、課題がうまくできるようになると「できた」という有能感に支えられ、その後の学習が自発的に進められるようになるという内発的学習意欲の枠組みをとおしてみると捉えやすいと考えた。

内発的意欲が発現するプロセスと上記で得られたカテゴリーを関連づけたものが**図2**のカテゴリー関連図である。これは、桜井(1997)<sup>8)</sup>の内発的学習意欲の発現プロセスを本実践の多読受講者の内発的学習意欲の発現プロセスとして捉え直したものである。有能感と自己決定感は、内発的学習意欲のみなもとであり、興味・関心や達成・挑戦という学習行動となって現れる。興味・関心や達成・挑戦は、楽しさや満足感というプラスの感情をもたらし、この感情は、また、有能感・自己決定感といった認知的な意欲のみなもとにフィードバックされ、次の達成や挑戦に向かうと説明される<sup>[6]</sup>。環境とは、授業の形態や方法、教材、教室の雰囲気など学習の環境にかかわる要因である。矢印は内発的意欲の発現プロセスを示しているが、そのプロセスでメタ認知がかかわっていることを示す。

有能感とは、桜井(1997)<sup>8)</sup>によると、「自分ができるんだ!」「自分はやろうと思えばできるん

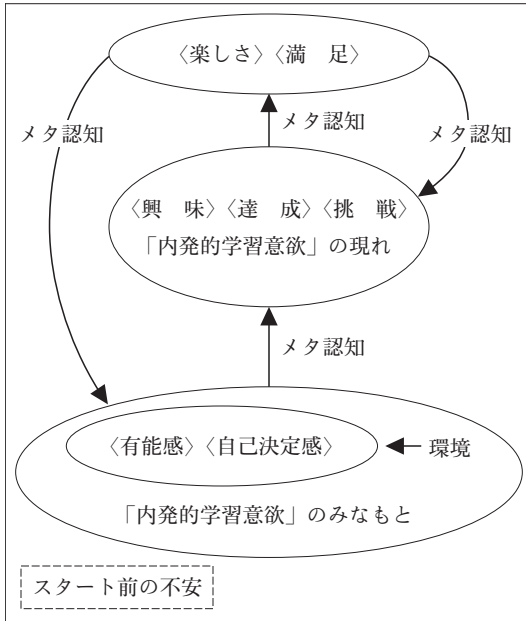


図2 多読の内発的意欲 (カテゴリー関連図)

(桜井 (1997) を改編)

だ！」という気持ちであり、効力感とも言える述べているが、「自己効力」という用語は、「課題を達成するための自分の能力に対する期待」をいい、自分の能力に対する期待が努力を持続させるという自己調整学習を支えるメタ認知がかかわる概念である (三宮 (2008)<sup>9)</sup>。したがって、本稿においては、「有能感」と「自己効力感」の両用語を併用するが、実際は、この二つの用語を厳密に区別することは難しいので特に区別する必要がないと思われるときは有能感を使う。本稿において、「有能感」は“perceived competence”であり、「自己効力感」は“self-efficacy”である。

以下、4.2 で得られたカテゴリーにもとづいて受講者の読むことへの内発的意欲の発現プロセスをたどり、意欲を支える要因について、「多読で得られる有能感または自己効力感」「達成・挑戦がもたらす楽しさ・満足感・誇り」「読解に関するメタ認知と読解方略」「多読に対する肯定的な評価」という観点から考察する。

#### 4.3.2 多読で得られる有能感または自己効力感 英語で本を読むという経験のほとんどない受講

者であるが、読むことへの不安に触れている記述は少ない (付2①)。これは受講者に英語不安がなかったことを示すものではなく、多読により有能感または自己効力感が感じられるようになったことで不安が低減されたことを示しているのではないかと考えられる。「意外と読めた (付2②-1)」「普通に読んで意味が理解できる (付2②-2)」という記述は、読み始める前は、読めるだろうかという不安もあったと思われる受講者が「この課題ならできる」という期待 (自己効力感) や有能感が感じられていることを示す記述であると思われる。不安が低減されるのは、このような自己効力感や有能感が読むことに対する意欲をもたらすからであろう。

受講者は、読む過程で、「単語力がつく (付2②-3)」「いろいろな表現がわかるようになる (付2②-6)」「知らない単語も読み進めるうちに理解できる (付2②-8)」「ときれときれでなく文章の流れがつかめるようになった (付2②-9)」など知識やスキルを向上させ、知識やスキルの向上にともない、「以前よりも確実に読めるようになった気がする (付2②-11)」「途中でやめた本が読めるようになり、進歩を実感できる (付2②-12)」など自己効力感や有能感を増している。また、「長文が読めるようになった (付2②-14)」「読む速さが速くなる (付2②-15)」など読む力以外にも、「(メールを書いているときに) ポンポン言いたいことが英語で出てくるようになった (付2②-16)」という書く力や「映画を見たときに以前よりも聞き取れるようになった気がした (付2②-17)」という聞く力においても有能感が感じられている。いずれも、自分の過去の能力を基準として能力の向上が感じられていることを示す記述であるが、自分が進歩したと思えることがそれぞれの有能感を高めていると思われる。

「回数を重ねるうちに英語の本に慣れ、抵抗がなくなる (付2②-23)」「英語への苦手意識が以前より減った (付2②-26)」など英語や英語で読むことに対する抵抗感や苦手意識の減少に関する記述は、自己効力感や有能感が増したことを示すものであろう。「英文を見たらあきらめてしまっ

ていた自分が変わった」という記述(付2②-25)は、英文を読むことへの抵抗感が減少し、無力感が取り除かれたことを示していると思われる。実際、この学生は「単語がたまっていく感じが好きなので…このままやめてしまうともったいないので、多読は続けたい」と述べており、自分の能力に対する期待(自己効力感)が生まれていることが分かる。このように、多読は、自分の能力に見合ったレベルで挑戦することができるので、英語力が高くななくても「この課題ならできるだろう」という自己効力感を得やすく、課題をやり遂げることで有能感を高めやすいのであろう。

受講者の自己効力感や有能感を生み出す要因の一つは、多読の教材の取り組みやすさにあると思われる。教材の多読用図書は、レベル毎に使用語彙がコントロールされているので、「自分に合ったレベルの本が読める(付2③-1)」「絵から単語の意味を推測できる(付2③-2)」「同じ単語が何度も出てくるので読みやすい(付2③-3)」など、語彙力のない受講者でも読める本があり、語の繰り返しが多く、受容語彙が増えやすいと感じられている。

また、「読めるレベルから始めるのはストレスがない(付2③-5)」「その日の気分で自由に読める(付2③-6)」「自然に読んでみようかなという気持ちになった(付2③-7)」「授業ではないみたいでリラックスできる(付2③-8)」など心理的な取り組みやすさも感じられている。強制されずに読みたい本を自由に読める環境がこのような心理的な取り組みやすさを感じさせるのであろう。

上記のような取り組みやすさだけでなく、教員とのコミュニケーションによっても意欲は影響を受ける。アンケートの調査結果が示しているように、「読書日誌(メール)をつけたり、返信をもらうことで、多読の進め方や読み方など気づくこともあった(付1-48)」という受講者は多い(平均で89.1%)。また、「先生と接する機会が多く、他にはない授業でよかった(付2③-9)」「メールで気軽に直接質問できる(付2③-10)」「先生からの返信が励みになった((付2③-11))」などの記述は、個別のフィードバックが意欲を支える要因と

なっていることを伺わせる。

#### 4.3.3 達成・挑戦がもたらす楽しさ・満足感・誇り

生み出された受講者の有能感は読むことに対する意欲をもたらし、達成や挑戦という行動に向かう。達成とは「最後まで自分の力でやり抜こうとする行動傾向」、挑戦とは「自分が現在できる課題よりもすこし難しい課題に挑戦しようとする行動傾向」である(桜井, 1997)<sup>8)</sup>。「読むことは楽しい(付2④-1)」「英語の本を読む楽しさを知る(付2④-2)」など楽しいという感情経験は、達成や挑戦に向かう行動をとおして得られるものであろう。

楽しさは有能感や自己効力感にフィードバックされ、内発的意欲を高め、さらに達成や挑戦に向かう。「読み終わった後に辞書を引き読み直す(付2⑤-1)」や「語数の多い本にチャレンジするようになった(付2⑤-2)」「自分のレベルよりも少し高いレベルに挑戦(付2⑤-3)」などの行動が見られるが、これらの行動は、主体的で、内発的であるばかりでなく、自己決定感が見られる。自己決定感とは「自分のことは自分で決めているんだ!」(桜井, 1997)<sup>8)</sup>という気持ちであるが、自律性があると言い換えることもできるであろう。「家で英語の本を読む(付2⑤-5)」「今後も1冊でも2冊でも授業外で読みたい(付2⑤-7)」「英語の本を買いに行く(付2⑤-9)」などの行動は、自己決定感が高く、自律性も高い。

有能感や自己決定感(必ずしも自覚しているとは限らないし、程度の差もあるだろう)に支えられる内発的な行動は、「たくさん本を読めてよかった(付2④-7)」「この授業がなければ英語の本をこんなに読むことはなかった(付2④-8)」などの満足感や「読み終わった後の達成感は忘れられない(付2④-10)」「読み切ったときにここまで読むことができた嬉しく思った(付2④-11)」などの喜び、また、「読書記録は宝物(付2④-12)」「こんなに読んだということが励み(付2④-13)」など誇りをもたらししている。楽しさや喜び、誇りという情動は、「英語を楽しむなんてこれまでに

はなかった感情 (付 2④-19)」「こんなにも英語が好きになれた自分がうれしい (付 2④-20)」「英語の授業を楽しみにする日が来るなんて人生が変わった (付 2②-21)」などの記述に見られるように、英語や授業に対する認知にも影響を与えている。

#### 4.3.4 読解に関するメタ認知と読解方略

課題が何を要求しているか、自分がどこまで理解しているか、問題解決にはどのような方略が必要かなど課題を達成するために、自己を観察し、必要に応じて方略を使用するのはメタ認知のはたらきである。多読では、自ら本を選択し、自らの力で読み、理解しなければならないなど、主体的に取り組むことが求められるので、自己観察が行われやすく、メタ認知がはたらきやすいと考えられる。「単語不足を実感 (付 2⑥-1)」「文型の知識や単語力がない (付 2⑥-2)」など自身の英語力不足についての気づきは、このようなメタ認知のはたらきによる自己観察が行われていることを示すものである。「わからない単語の意味を自分で導き出す形がよかった (付 2⑥-5)」や「英語力のない自分でもそれなりに読める方法が分かった (付 2⑥-7)」などは、方略使用の自覚があり、その有効性の評価も行っており、メタ認知がはたらいっていることを示すものであろう。「読み方が分からない単語をそのままにしておくことが苦手意識を生む (付 2⑥-8)」という、自己観察が問題解決に向けて必要な方略に気づかせるというメタ認知的活動 (自己調整活動) が行われていることを示すと思われる記述もある。

メタ認知のような認知的処理には意欲、興味、没頭のような情動を含む経験が深くかかわっているとされている (秋田, 2008)<sup>10)</sup> が、「物語に集中することで理解が深まる (付 2⑥-10)」「考えながら読むと内容がしっかり頭に入ってくるようになって楽しくなった (付 2⑥-11)」また、「自然に引き込まれて読んでいた (付 2⑥-13)」「物語が生き生きして面白く感じるようになり楽しさが違って来た (付 2⑥-15)」などは、このような情動を経験している記述であろう。読む過程で深い

認知処理が行われていることを示していると思われるが、このようなプロセスで本実践の受講者はどのような読解方略を使用しているのだろうか。

読解方略<sup>7)</sup>の使用について、2011年度後期の受講者を対象に調査を行っているが、その結果は次のとおりである (付表 1 参照) (図 3)。

- ① 「英文の意味をはっきりさせながら読んだ (27.3%, 付 1-22)」
- ② 「わからないところはゆっくりと読んだ (81.8%, 付 1-23)」
- ③ 「意味が分からないところや難しいところを繰り返し読んだ (45.5%, 付 1-24)」
- ④ 「わからなくなったら、どこからわからなくなっただかを考え、そこから読み直した (36.4%, 付 1-25)」
- ⑤ 「わからないところは飛ばして読んだ (63.6%, 付 1-26)」
- ⑥ 「一度読んだだけでは理解できないときは、もう 1 回読んで理解しようとした (90.9%, 付 1-27)」
- ⑦ 「時々読むのをやめて、それまでに読んだ内容を思い出した (45.5%, 付 1-28)」

「わからないところは飛ばして読む」(上記⑤) という方略は、本実践で勤める読解方略の一つであり、最も多くの者に使用されていると予想されたが、この方略よりも、「一度読んだだけでは理解できないときは、もう 1 回読んで理解しよう

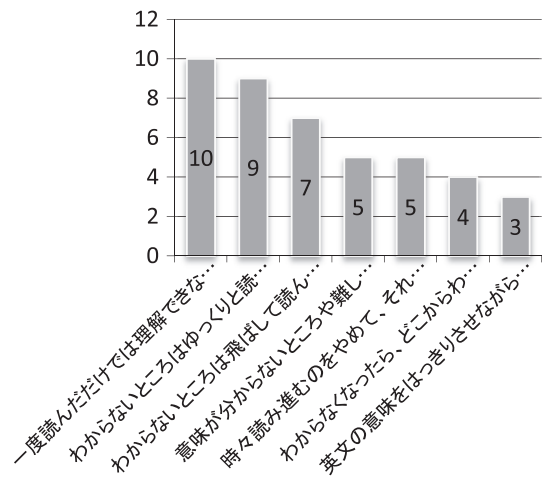


図 3 使用された読解方略 (n=11)

とする」(上記⑥) および「わからないところはゆっくりと読む」(上記②) という方略のほうが多くの者に使用されていることが分かる。受講者は、わからない部分を気にせずどんどん読み飛ばしているわけでもなく、簡略的な内容の理解で満足しているわけでもない。より深い理解を得るために読み方をコントロールするのはメタ認知的な読みのプロセスである。方略を教えるだけでは方略を使えるようにはならないが、使用方略は限られているにせよ、自分自身の力で読む経験をする中で、本多読授業の受講者は、自然に方略を身につけ、使用するようになっていくと考えられる。より深く読みたいという意欲の現れでもある。

読む過程で経験する情動体験は、メタ認知と深くかかわっており、達成感となって当人の能力を伸ばす方向に向かい(上淵, 2004)<sup>11)</sup>、読解で没頭経験をしたことがある者はその後の読解力に伸びが見られるという(秋田, 2008)<sup>10)</sup>。多読で経験される情動は、受講者の読解力を伸ばし、読みのメタ認知的活動をとおして自己効力感や有能感を育てていると言えるであろう。

#### 4.3.5 多読に対する肯定的な評価

以上見てきたように、本多読の受講者は、有能感や自己決定感を高めながら、内発的に多読に取り組んでおり、平均で約90%の受講者が「英語を学ぶ上で多読というやり方は好きである(付1項17)」と回答している。多読に対する受講者の評価は高く、多読への価値や評価に触れた記述は多い(付2⑦)。

「毎日ちゃんと触れていれば確実に読めるようになることを身をもって感じた(付2⑦-1)」「易しい英語でも多く読めばそれなりに読む力が伸びる(付2⑦-2)」「英語は多く読むことが大事だと気づく(付2⑦-3)」などは、多く読むことの価値に触れている。「多読は英語に触れ、英語が好きになる大事な方法(付2⑦-10)」「英語が楽しく学べる方法の1つ(付2⑦-13)」「自分の上達したレベルが確かめられる楽しさがある(付2⑦-14)」などは、楽しさという内発的な価値に触れている記述である。また、「自分にあったレベル

の本を読むという取組が気に入った(付2⑦-15)」「自由に好きなものに挑戦できる(付2⑦-16)」など、選択の自由さに対する評価があり、「(今までは)わからないところはすべて調べなければならなかった(付2⑦-17)」「今までの授業は自分のペースでできなかった(付2⑦-18)」などは、逆説的であるが、これまでの学習経験とは異なる学習方法に対する肯定的な評価であろう。

さらに、「留学したいと考えているが英語の多読は意味がある(付2⑦-22)」「自分のために受けるべき授業だと真剣に考えた(付2⑦-23)」「学ぶことは何かを考えさせられるよいきっかけになった(付2⑦-24)」など、自分にとって必要であるあるいは役に立つという実用的な価値に加えて、学びへの意欲という、自己実現にかかわる内発的な価値に触れていると思われる記述もある。

以上のような多読への肯定的な評価は、多読で経験した有能感や成功体験がもたらすものであり、多読への内発的な意欲がこれまでの英語学習観の見直しを促していることが示唆されている。

## 5 まとめ

本実践の多読は、自分の読みたいと思う本を選んで読むことから得られる楽しさ、面白さが授業というより自分のために読むという経験となり、受講者の読むことへの意欲を高めている。このような意欲を育て、支えているのは安定した有能感である。有能感は自己決定感とともに読むことへの内発的意欲を発現させ、内発的意欲は、読むプロセスにおいて知識やスキルの向上とともに有能感や自己決定感を増しながら、達成や挑戦に向かい、楽しさや満足感、喜びなどの情動をもたらし、さらに読むことに対する意欲を高めるという学習のよい循環を生んでいる。言い換えると、このようなよい循環を促すのは、安定した有能感であり、メタ認知的プロセスを支える自己効力感であるということができようであろう。

廣森(2006)<sup>12)</sup>が指摘しているように、内発的意欲を高めるうえで重要な役割を果たすのは有能感と選択の自由さであろう。本実践においても、



受講者の興味・関心を引くような適切な教材があり、自分で本を選び、自分のペースで読むという自発性が重んじられる環境が、受講者の意欲を高めていることが示唆されている。

また、読む過程で経験する情動体験はメタ認知を育てることが示唆されたが、情動体験がもたらす誇りが自己を対象として意識し評価する情動(上淵, 2008; 2008)<sup>13,14)</sup>として、メタ認知活動を促し、意欲を高めていると捉えることができるであろう。上淵(2008)<sup>13)</sup>は、「自尊心は、学びの楽しさ、おもしろさ、喜び、そしてこれからの学習への自信と深く結びついている (p. 88)」と述べているが、自尊感情と関係がある誇りが意欲を高めるという視点は、英語不安を持つ学習者の動機づけを理解するために必要な視点であると思われる。

## 6 おわりに

誰にでも「できること」「わかること」を求める有能さへの欲求などの心理的欲求がある。Graded Readers だけでなく Leveled Readers をも利用する「易しい英語で始める多読」は、取り組みやすく、誰でも自分にもできそうだと感じられる要素があり、英語習熟度によらず、実際にやってみようと思わせることに成功している。また、強制されることなく自由に読みたいと思うものを読むという学習者個人の選択が尊重される環境があることが、学習者に今できることに目を向けさせ、有能感の得られやすい学習となっている。

英語多読が、英語習熟度の高くない学生にとっても、Day & Bamford (1998)<sup>1)</sup>のいう「読むことによって報われる」活動となっていることを示すと思われる学生自身のコメントを最後に紹介したい。

…私は英語が大嫌いでした。1年生のとき英語Ⅰと英語Ⅱの単位を落としています。その時は、授業毎に指され、楽しいなんて思いもせず、英語の授業が辛いと感じることがとても多かったです…「今自分が読めるレベルから始め、少

しずつ読めるようになればいい、何よりも楽しんで」ということを言われ、自分の中で英語というもののイメージが少しずつ変わってきました。英語を楽しむなんて考えはそれまでの私にはなかった感情です。何事も続ける秘訣は楽しむことだということがあらためてわかりました…多読という授業を受けることができて私の人生が変わったように思います。英語が大嫌いだった私が英語の授業を楽しみにする日が来るなんて…先生からの返信も励みになりました…これからも自分のできる範囲で多読を続けていけたらと思っています…

### 《注》

- [1] この数値は、いくつかの実践報告(酒井・神田, 2005; 高瀬, 2008)<sup>4,5)</sup>を参考にして設定した。
- [2] リアクション・レポートとは、共感する登場人物、ストーリーや行動において興味を持った箇所またはよくわからない箇所、好きではない箇所、もし自分が登場人物だったとしたらどう行動するか、また、印象に残った言葉など、自分はその本の内容をどう受けとめたかという観点から書くレポートである (Day & Bamford, 1998)<sup>1)</sup>。ブック・レポートは、自分の好きな本について、本のストーリーを紹介し、印象に残る言葉や、どんなところが面白かったのか、感動したのか、なぜその本が好きなのか、人に勧めるとしたらなぜなのかということなど短いコメントで書くレポートである。
- [3] 評価は、読書記録 (20%)、上記レポート3本 (各 20%)、読書日誌 (20%) の総合評価で、評価の観点は、主に、日本語による記述量および内容の質である。
- [4] “self-esteem” という用語には「自尊心」と「自尊感情」のどちらの訳語も当てられている。本稿では、特に意識して意味の使い分けはしていないが、前後の文脈により文章上の使い分けをしている。
- [5] アンケート調査は、2010年度前期および2011年度前期については、5段階評定で回答を求めたが、2011年度後期は yes/no の二者択一である。したがって、データの集計に関しては、各項目につき、前者に関しては5段階のうち5 (「よく当てはまる」) または4 (「当てはまる」) の評定者、後者に関しては yes と回答した者を合算して割合を算出した。
- [6] 桜井 (1997)<sup>8)</sup> の図 (p. 19) では興味は知的な好奇心、環境は他者受容感という用語が使用されている。

[7] 秋田 (2008)<sup>10)</sup> を参考にした。

#### 引用・参考文献

- 1) Richard R. DAY, and Julian BAMFORD: Extensive reading in the second language classroom, Cambridge University Press, 1998.
- 2) 城一道子：英語多読授業の導入とその成果 — 能動的な学習者，江戸川大学語学教育研究所紀要，2011，vol.9，pp.1-13.
- 3) 酒井邦秀：快読100万語！ ペーパーバックへの道，ちくま学芸文庫，2002.
- 4) 酒井邦秀，神田みなみ（編著）：教室で読む英語100万語 — 多読授業のすすめ，大修館書店，2005.
- 5) 高瀬敦子：やる気を起こさせる授業内多読，近畿大学英语研究会紀要，2008，vol.2，pp.19-36.
- 6) Stephen KRASHEN: Language acquisition and language education, Hertfordshire: Prentice Hall, 1989.
- 7) 清田洋一：リメディアル教育における自尊感情と英語学習，リメディアル教育研究，2010，vol.5，no.1，pp.37-43.
- 8) 桜井茂男：学習意欲の心理学 自ら学ぶ子どもを育てる，誠信書房，1997.
- 9) 三宮真智子：学習におけるメタ認知と知能（第2章），三宮真智子（編著）メタ認知 学習力を支える高次認知機能，北大路書房，2008，pp.17-37.
- 10) 秋田喜代美：文章の理解におけるメタ認知（第6章），三宮真智子（編著）メタ認知 学習力を支える高次認知機能，北大路書房，2008，pp.97-109.
- 11) 上淵寿（編著）：動機づけの最前線，北大路書房，2004.
- 12) 廣森友人：外国語学習者の動機づけを高める理論と実践，多賀出版，2006.
- 13) 上淵寿：学習における動機づけとメタ認知（第5章），三宮真智子（編著）メタ認知 学習力を支える高次認知機能，北大路書房，2008，pp.75-96.
- 14) 上淵寿（編著）：感情と動機づけの発達心理学，ナカニシヤ出版，2008.

付表1 多読に関するアンケート調査結果(抜粋)

	質問項目	2010年 前期	2011年 前期	2011年 後期	平均
		n=20	n=18	n=11	n=49
多読授業を履修した理由：					
1	英語が好きだから。	75.0%	38.9%	45.5%	53.1%
2	英語の本を読みたいから。	75.0%	66.7%	54.5%	65.4%
多読について：					
6	多読の授業は楽しい。	95.0%	88.9%	100.0%	94.6%
7	英文を読むことに対する抵抗感が以前より減った。	95.0%	94.4%	100.0%	96.5%
8	英語の本を読むことに意欲的に取り組むことができた。	95.0%	83.3%	81.8%	86.7%
9	多読の本を借りて授業外でも読んだ。	—	—	90.9%	90.9%
13	興味のある本を自分で選んで読むのは楽しい。	95.0%	83.3%	90.9%	89.7%
14	多読で読書の楽しみを味わうことができた。	90.0%	83.3%	72.7%	82.0%
16	多読は自分の英語力を伸ばせると思う。	95.0%	77.8%	90.9%	87.9%
17	英語を学ぶうえで多読というやり方は好きである。	95.0%	83.3%	90.9%	89.7%
18	今後も多読を続けたい。	80.0%	88.9%	90.9%	86.6%
19	一人でも多読は続けられそうだ。	60.0%	55.6%	45.5%	53.7%
20	多読は、一人よりも仲間と読むほうが続けられると思う。	50.0%	50.0%	72.7%	57.6%
読み方について：					
21	授業中45～60分は集中して読んだ。	—	—	45.5%	
22	英文の意味をはっきりさせながら読んだ。	—	—	27.3%	
23	わからないところはゆっくりと読んだ。	—	—	81.8%	
24	意味が分からないところや難しいところを繰り返し読んだ。			45.5%	
25	わからなくなったら、どこからわからなくなっただかを考え、そこから読み直した。			36.4%	—
26	わからないところは飛ばして読んだ。			63.6%	—
27	一度読んだだけでは理解できないときは、もう1回読んで理解しようとした。	—	—	90.9%	—
28	時々読み進むのをやめて、それまでに読んだ内容を思い出した。	—	—	45.5%	
32	知らない単語は意味を推測しながら読んだ。	80.0%	94.4%	90.9%	88.4%
36	CDを聞きながら読むのは楽しい。	—	77.8%	72.7%	—
37	CDを聞きながら読むほうが理解しやすい。	—	72.2%	81.8%	—
41	英文の理解力が向上したと感じる。	—	—	81.8%	—
43	読む速度が速くなったと感じる。	—	—	90.9%	—
44	読んだ本の内容の7割以上は理解できていると思う。	—	72.2%	81.8%	—
その他：					
47	読書日誌(メール)の教員からの返信はあったほうがよい。	95.0%	77.8%	100.0%	90.9%
48	読書日誌(メール)をつけたり、返信をもらうことで、多読の進め方や読み方など気づくことがあった。	95.0%	72.2%	100.0%	89.1%

付表2 カテゴリーと記述例

## ① スタート前の不安

- 1 英語で本を読めるか不安
- 2 どんな本を読んでいいのかわからない
- 3 何万語も読めない
- 4 楽しんで英語を読むということがなかった
- 5 テストなどの長文は飛ばしていた
- 6 英語で読むことに勉強という意識があって身構えていた

## ② 有能感または自己効力感

- 1 意外と読めた
- 2 普通に読んで意味が理解できる
- 3 単語力がつく
- 4 単語がたまっていく感じが好き
- 5 不規則動詞について理解が深まる
- 6 色々な表現が分かるようになる
- 7 一つの意味だけでなくいろいろな使い方があることが分かった
- 8 知らない単語も読み進めるうちに理解できる（語彙方略）
- 9 とぎれとぎれでなく文章の流れがつかめるようになった（理解方略）
- 10 自分に合った速度で読める
- 11 以前よりも確実に読めるようになった気がする
- 12 途中でやめた本が読めるようになり、進歩を実感できる
- 13 本の内容が理解できるようになった
- 14 長文が読めるようになった
- 15 読む速さが速くなる
- 16 チャットをするとポンポン言いたいことが英語で出てくるようになった
- 17 映画を見たときに以前よりも聞き取れるようになった気がした
- 18 英語のレベルが上がったと感じる
- 19 楽しく確実に力がついたと感じる
- 20 本の内容を楽しむようになった
- 21 より英語にかかわっていきたいと思うようになった
- 22 これからも英語についていろいろと知りたい
- 23 回数を重ねるうちに英語の本に慣れ、抵抗がなくなる
- 24 英文を読むことに対する抵抗感はほとんどなくなった
- 25 英文を見たらあきらめてしまっていた自分が変わった
- 26 英語への苦手意識が以前より減った

27 苦手だった英語も悪くない

## ③ 教材と学習環境（外的環境）

- 1 自分に合ったレベルの本が読める
- 2 絵から単語の意味を推測できる
- 3 同じ単語が何度も出てくるので読みやすい
- 4 英語に対するとつきにくさがない
- 5 読めるレベルから始めるのはストレスがない
- 6 その日の気分で自由に読める
- 7 自然に読んでみようかなという気持ちになった
- 8 授業ではないみたいでリラックスできる
- 9 先生と接する機会が多く、他にはない授業でよかった
- 10 メールで気軽に直接質問できる
- 11 先生からの返信が励みになった
- 12 先生とのメールのやりとりが魅力的だった

## ④ 楽しさ・満足感・誇り

- 1 読むことは楽しい
- 2 英語の本を読む楽しさを知る
- 3 英語の楽しさを知ることができた
- 4 これまで楽しんで英語を読むということがなかったのでもいい経験
- 5 こんなに楽しいとは思わなかった
- 6 楽しくて大好きな授業
- 7 たくさんの本を読めてよかった
- 8 この授業がなければ英語の本をこんなに読むことはなかった
- 9 読めるという実感がある
- 10 読み終えたあとの達成感は忘れられない
- 11 読み切ったときにここまで読むことができた嬉しく思った
- 12 読書記録は宝物
- 13 こんなに読んだということが励み
- 14 英語の授業でここまでよくできたのは初めて
- 15 こんなにも確実に力がついたと感じた英語の勉強は初めて
- 16 英語に対する思いが変わった
- 17 英語はつまらないのではなく、今まで興味がもてなかっただけということがよくわかった
- 18 英語の本を読むことが好きになった
- 19 英語を楽しむなんてこれまでにはなかった感情
- 20 こんなにも英語が好きになれた自分がうれしい
- 21 英語の授業を楽しみにする日が来るとは人生が変わった

## ⑤ 自己決定感（自律性）

- 1 読み終わったあとに辞書を引き読み直す
- 2 語数の多い本にチャレンジするようになった
- 3 自分のレベルよりも少し高いレベルに挑戦
- 4 難しいけれど面白いからそのまま読み続けたい
- 5 家で英語の本を読む
- 6 授業では図書館の本を読み、家では、自分で買った本を読む
- 7 今後も1冊でも2冊でも授業外で読みたい
- 8 もっと読みたいと思うようになった
- 9 英語の本を買いに行く
- 10 多読の楽しさを感じて帰りに英語の本を買いに行った

## ⑥ 読解に関するメタ認知

- 1 単語不足を実感
- 2 文型の知識や単語力がない
- 3 どれだけ英語を知っているか知らなかった
- 4 英語が全く読めていなかったと分かった
- 5 分からない単語の意味を自分で導き出す形がよかった
- 6 絵を見て単語の意味を推測するプロセスがよい
- 7 英語力のない自分でもそれなりに読める方法が分かった
- 8 読み方が分からない単語をそのままにしておくことが苦手意識を生む
- 9 イントネーションなど音声にも目を向けることが大切
- 10 物語に集中することで理解が深まる
- 11 考えながら読むと内容がしっかり頭に入りようになり楽しくなった
- 12 自分で話を理解しようとしなければ理解できないから、その分内容が頭に入ってきて物語に集中しやすくなる
- 13 自然に引き込まれて読んでいた
- 14 英語だけど楽しい、悲しいとかなどの雰囲気を感じることができた
- 15 物語が生き生きして面白く感じるようになり楽し

さが違ってきた

- 16 まるで日本語の本を読んでいるときのように読むことができた

## ⑦ 多読という学習法に対する評価

- 1 毎日ちゃんと触れていれば確実に読めるようになることを身をもって感じた
- 2 易しい英語でも多く読めばそれなりに読む力が伸びる
- 3 英語は多く読むことが大事だと気づく
- 4 読むことの大切さを知る
- 5 このように様々な文章や語に触れ合う機会はなかなかない
- 6 英語は触れていかなければ成長はないと感じた
- 7 英語に携わっていることが大切
- 8 大量の本を読むということは英語の理解を速くする
- 9 間違いなく私の英語力の向上につながったと思う
- 10 多読は英語にふれ、英語を好きになる大事な方法
- 11 成果が感じられない人にすすめたい
- 12 やめてしまうともったいない
- 13 英語が楽しく学べる方法の1つ
- 14 自分の上達したレベルが確かめられる楽しさがある
- 15 自分にあったレベルの本を読むという取組が気に入った
- 16 自由に好きなものに挑戦できる
- 17 (今までは) わからないところはすべて調べなければならなかった
- 18 今までの授業は自分のペースでできなかった
- 19 単に教科書を読んで訳すような勉強ではない
- 20 訳さずに読むというのは新鮮な経験
- 21 このような学習法があるなんて初めて知った
- 22 留学したいと考えているが英語の多読は意味がある
- 23 自分のために受けるべき授業だと真剣に考えた
- 24 学ぶことは何かを考えさせられるよいきっかけになった

## Extensive Reading in Remedial English Class: Variables influencing the development of students' favorable attitudes

JOICHI Michiko

### Abstract

This extensive reading class has fostered positive attitudes of the participants who do not feel confident about their English ability and whose self-reported English ability is EIKEN pre-second level or lower. They enjoyed reading easy reading materials including children's books and developed a reasonable expectation of their ability of reading successfully. The author examined variables that influence the development of their favorable attitudes toward reading based on data collected from responses to a questionnaire and written comments. This study identified such variables as perceived competence and feeling of efficacy. Preliminary findings indicate that when they took responsibility for and were able to control their own reading tasks the participants experienced an enhanced sense of accomplishment and interest in reading.

**Keywords:** remedial, extensive reading, easy reading materials, favorable attitudes, perceived competence, self-efficacy, meta-cognition